

田沼 肇先生のご逝去を悼む

五十嵐 仁



2000年8月9日（木）午後2時33分、田沼肇先生が新宿区の病院で亡くなられた。享年74歳であった。田沼先生は、パーキンソン症状を伴う進行性核上性まひという難病に罹患され、最後は臓器全体の機能が低下して呼吸不全となり、息を引き取られた。

この難病の症状がそれとなく確認されるようになったのは、1987年の松山での社会政策学会の時だったという。そのときから13年。先生は難病との苦しい闘いの末に、ついに力尽き、他界された。この間、先生を支えてこられたご家族、とりわけ祥子夫人のご苦勞たるや、想像に余りあるものがある。

*

田沼肇先生は、1926年4月19日、群馬県桐生市に生まれ、誕生後まもなく東京に転居、33年に青山師範学校付属小学校を卒業された。その後、武蔵高校を経て、48年に東京帝大経済学部を卒業され、商工省調査統計局に就職された。

商工省には2年間在籍されたが、やがてそこをパージされ、抗議のハンストをもって抵抗するも効なく、田沼先生は50年4月に法政大学大原社会問題研究所に入所された。ここから、法政大学および大原社会問題研究所と先生との縁が始まる。

その後、63年に法政大学社会学部に助教授として移られるまで、先生は大原研究所に14年間在職された。この間、主として研究所が毎年刊

行している『日本労働年鑑』の編集と執筆に当たられ、同時に、各種の調査や資料の収集・整理に従事された。

社会学部に移られてからも、先生は研究所に深い愛着と関心を寄せられ、何かと援助・協力の手を差しのべられた。先生が深く関わられた日本フィル争議の資料や原水禁運動関連の資料を研究所に寄贈されたのも、研究所への先生の深い関心の現れだったと思われる。

また、亡くなられる直前まで、高橋彦博社会学部教授の書かれた『大原社会問題研究所創立前史の記録』（『大原社会問題研究所雑誌』第492号、99年11月）を読み聞かせてもらっていたという。先生は、最後まで大原社研の精神的ファミリーの一員だったといえよう。

大原社研での業務の傍ら、先生は、社会政策、労働問題、労働運動論、労働運動史に関する論攷を精力的に発表され、同時に、世論調査や統計についての研究や社会階級構成の問題などについても積極的に発言された。

先生は、社会学部に移られた翌年に教授となられ、大学紛争の渦中であつた1970年に社会学部長・大学評議員として紛争の收拾に当たられた。また、78年4月から81年3月まで、再び社会学部長・大学評議員の職に就かれた。そして、学部長の職を離れてからわずか6年後の1987年に、難病の最初の兆候が現れたことは既に述べたとおりである。

先生は、闘病生活を続けながら研究・教育に従事され、93年3月の退職まで6年間にわたってその職を全うされた。そのかげには祥子夫人の献身的なバックアップをはじめ、回りの人々の協力や支えがあったが、同時に、難病に屈せず、大学や社会、学問や運動との接点を持ち続けようとされた先生ご自身の強靱な意志と情熱をうかがうことができる。

また、1994年3月、都知事が「重度心身障害者手当受給資格認定」申請を非該当として却下したのを不服として「異議申立」を行い、先生は裁判闘争を始められた。難病を抱えながらの裁判はさぞ大変だったと思われるが、先生は障害者の人権確立と都の福祉行政是正のために、わが身を省みず敢然と立ち上がられたのであった。

*

田沼先生の研究活動の歩みは、先生が還暦を迎えられた1986年に、田沼明子氏によって作成された『田沼肇 執筆目録』（1986年4月18日現在）で、その概略を知ることができる。もちろん、先生はその後も研究活動を停止されたわけではない。病軀をおして『労働運動と企業社会』（大月書店、1993年）、『私のなかの平和と人権』（草の根出版会、1995年）などの編著を残されている。

前掲の執筆目録は、10に分類されており、収録されている文章の数は全部で754編にのぼる。現物確認できないために収録されなかったものもあり、86年以降の執筆文献もかなりの数になっているというから、その執筆量たるや膨大なものになる。数の多さだけでなく、研究・発言の分野の広さや多様さも注目に値する。そこからは、幅広い分野にわたって多くの発言を行った先生の姿が浮かび上がってくる。

このような多様な研究・発言のうち、先生の研究の中核をなすものは、「社会政策・労働問

題一般」「労働運動論」「労働運動史」の3つであり、これに続く研究分野として「階級構成論」「調査統計論」がある。『労働組合運動の理論』（大月書店、1969年）、『現代の労働組合運動』（大月書店、1978年）、『現代の労働政策』（大月書店、1981年）などの編著が示すように、これらの分野が、労働運動・社会政策研究者としての先生の主たるフィールドであった。

これらのなかでも、私にとって思い出深いのは、田沼肇・塩田庄兵衛・中林賢二郎『戦後労働組合運動の歴史』（新日本新書、1970年）である。出版当時、都立大学在学中だった私は早速買い求めて一読し、大いに感銘を受けたが、執筆者3名の先生方にその後お世話になろうとは、その時には夢にも思わなかった。この本の中で、田沼先生はサンフランシスコ体制への移行期から60年安保までを担当されている。

誤りを恐れずに言えば、先生の研究上の特徴は、その先見性と柔軟性にあると思われる。先見性は、世論調査のあり方や統計の利用の仕方、労働運動における階級構成論の意義、中間階層論やサラリーマン・ホワイトカラーの問題、労働運動における主体形成、婦人や女性労働者が抱える問題、企業社会論など、時代の先端を行く問題に比較的早くから注目され、その解明に取り組みられた点に示されている。

また、このような問題の解明に当たっては、マルクス主義の立場に立ちつつも、批判相手に積極的な面があればこれを評価し受け止めるという、目配りのきいた柔軟で開かれた姿勢をとり、決して自己の立場に拘泥されることはなかった。このような柔軟な態度には、先生の人柄も反映されているように思われる。

*

このほか、『執筆目録』には「大学・研究者・学生論」「時評など」「身辺断章」なども分類されている。これらは大学で研究・教育に従

事していればたいてい何らかの形で発言されるものである。しかしここでも、革新統一戦線についての論攻が多く、先生らしい特色が示されている。

とはいえ、おそらく他の研究者とは異なる、先生にとっての最大の特色は、「原爆被爆者問題」と「平和・原水爆禁止運動」が『執筆目録』の分類項目として挙げられていることであろう。ここに田沼先生独自の世界がある。現に、項目別分類で144点と最も多くを占めているのが、「平和・原水爆禁止運動」である。

先生がこの問題に関心をもたれたのは、「ビキニ水爆被災事件をきっかけにして」(『私のなかの平和と人権』45頁)であった。また、この本の「著者略歴」によれば、「1955(昭和30)年～原水爆禁止運動に参加」とある。60年代に入って以降、先生はこの主題についての論攻を続々と発表され、71年には『原爆被爆者問題』(新日本出版社)という単行本を出されている。さらに、79年からは原水協副理事長に就任され、83年からは代表理事として運動の先頭に立たれた。

このように、先生は書斎の人ではなく、行動の人であった。労働運動や原水禁運動などの社会的な運動と深く関わり、自らも一人の運動家として実践活動に参加され、そこから生じる問題意識や課題に研究者として回答を与えることが、先生の研究スタイルであった。先生は運動の外から研究者として助言されていたのではない。運動の中から研究者として発言し続けたのである。

*

最後に、私事にわたって恐縮だが、個人的な感慨を述べさせていただきたい。田沼先生と私がより深く知り合うきっかけとなったのは、大学院での私の指導教授だった中林賢二郎先生が亡くなられてからである。中林先生の死は私に

とって大きなショックだったが、その後、先生の追悼文集や追悼会のため委員会が作られ、田沼先生はその代表になられた。

私は事務局責任者として仕事をさせていただいたので、期せずして田沼先生との共同作業が必要になり、先生とのおつきあいも深まっていた。そして、先生の人柄や魅力に惹かれ始めたその時に、先生は病魔に冒されるという不幸に見舞われたのである。『追憶 中林賢二郎』の刊行は87年2月で、先生の発病が疑われたのはその年の秋であった。

私が先生に最後にお会いしたのは、昨年11月2日の大原社会問題研究所創立80周年記念シンポジウムの時である。この時、私は司会だったので、途中の休憩の時に言葉をかけることしかできなかった。この時先生は、時にほほえみながら、長時間、熱心にシンポジウムに耳を傾けておられたという。

あの時、連合と全労連の事務局長が初めて同席して討論するという「歴史的な出会い」があったわけだが、その様子を先生はどのように見ておられたのだろうか。そしてどのような感想を持たれたのだろうか。今となっては、先生のご意見をうかがうことは永久にできなくなってしまった。

*

残された私たちにできることは、先生のご遺志を継ぎ、先生の思いを我が思いとし、先生の目指した高みに向けて一歩でも二歩でも近づいていくことしかない。でき得るならば、その歩みを草葉の陰から見守っていただきたいと思う。

先生の教えを受けることも、酒を酌み交わして笑い合うことも、もうできなくなってしまった。深い寂寥感に打ちひしがれそうになるが、今はただ、先生のご冥福を心からお祈りするだけである。先生、安らかにお眠りください。

(いがらし・じゅん 法政大学大原社会問題研究所教授)